

情

報があふれている世の中で、これだけ情報があふれていると、その情報の海で溺れないように、なるべく効率的に判断したり、行動したりすることが求められる、と世間ではいわれている。

書店に行けば、その手の実用書はいくらでもある。整理術指南書、生き方指南書、省コスト指南書など、分野は違うものの、無駄を省いて短時間で最大の効率をあげるためのノウハウや段取りを説く本はかぎりなく多い。

私もまた、現代社会の一員として生きるべく、そうした類の本を読んだことがある。部屋がちつとも片付

かないので、整理術の本を読んで整理しようと思ったのである。ある本によると、半年以上開いていない本や資料はこの先も使わないはずだから捨て、残った本をテーマ別に分けてみなさいとあった。

なるほど、まわりを見回してみると半年どころか何年も開いていない本や資料が結構ある。これらをごっそりと捨ててしまえたら、どんなにすっきりするだろう。しかし、仕事の資料なら別だろうが、本の場合それを買ったときの思い出や記憶と結

びついているものが少なくない。

たとえ本は開かなくても、ランダムに並んだ背表紙を眺めながら記憶の淵を漂っていると、思いがけない発見があり、それがアイディアを生み出すこともある。おそらく効率的にテーマ別に整理された本棚では、先が見えてしまっただけで思いがけない発見などはあまり浮かばないのではないか。結局整理したのは、その整理術の本だった。

もちろん、無駄を省くこと、段取りよく効率的に物事を処理すること

旅の曲者

51

道草をしよう

文・写真／田中真知
Tanaka Mochi

イラスト／bozen

を収集したり、ブログを書いたりしながら旅行している若い人がいる。そういうスタイルもありだとは思いますが、ときどき感じるのは、そこまで旅を管理というか、プロデュースしながら旅するというスタイルに対する漠然とした違和感である。

たとえば、トラブルや無駄を避けるために、あらかじめ情報を集めて、なるべく思い描いたとおりの旅をする。美味しいものを食べ、人びととふれあって、きれいな風景の場所を写真を撮って、土地の名産品を土産

に必要なのはわかる。以前、エジプトにマクドナルドがオープンした当初はカウンターに従業員が30人以上もひしめいていて、ハンバーガーと飲み物を注文しただけなのに、5人以上のスタッフを経由して、挙げ句の果てに注文と違う品が出てくることなどが時々あった。たしかに、こういうのは無駄を省く余地があるだろう。

しかし、あまり若い頃から効率的に行動する癖を身につけるのはどうなのだろう。たとえば最近では旅先でインターネットに接続して、情報を収集したり、ブログを書いたりしながら旅行している若い人がいる。そういうスタイルもありだとは思いますが、ときどき感じるのは、そこまで旅を管理というか、プロデュースしながら旅するというスタイルに対する漠然とした違和感である。

スである。移動手段が小さく小さな村で1週間待たされたり、信用した人にカネをだまし取られたり、朝起きたら貴重品一式が消えていたり、道に迷ってまったく知らない土地に迷い込んだり、病気で入院したり、野生動物に襲われたり等々。

もちろん、それはけっしてそのときは楽しい経験ではない。自分の思惑がごとごとく外れて、とんでもない寄り道や道草を強いられるのだから。しかし、後になって強烈に思い出されるのは、計画通りにトラブルなく楽しめた旅よりも、余計なことだらけの旅の方なのだ。

トラブルや無駄がないと、自分の脳の中をぐるぐる巡っているのと同じである。自分があらかじめ思い描いた美しさや、楽しさをなぞっているだけで、そこには新しい発見はない。少なくとも、いまの自分が否定されることはない。逆に、トラブルや失敗というのは自分の思いこみの限界を教えてくれる。自分の外側に世界が存在し、その世界との間に不調和があることを否応なく意識させられるのだ。

それはけっして心地よい経験ではないが、自分にとってかけがえのない体験になるのはこちらの方である。比較的なこともスムーズに進む欧米の先進国などよりも、一筋縄



エチオピア北部にある岩窟修道院。麓からの高さは約150m。どうしてこんな峻険な岩壁に造らなくてはならなかったのか、効率性の点から考えると理解不能である。

ではいかなるアジアやアフリカの国々に自分が惹かれるのもそのせいなのだろう。

効率的に、無駄なく行動するというのは、いいかえれば道草をしないことである。決められたルートを最短の距離と時間で行き来する。それはたしかに円滑に物事を処理することにつながるだろう。けれども、こうした姿勢から、なにか新しく創造的なものが出てくるのだろうか。

たとえば、ビジネスマンだからといってビジネス書だけを読んでいるような人が、本当に創造的な仕事ができるのだろうか。弁護士になりたからといって法律の勉強だけを効率的にしている、果たして本当の意味でよい弁護士になれるのだろうか。むしろ法律の勉強は大切だが、そのほかにいかに幅広い人生経験や読書経験、感情体験などを持っているかということこそが、個性や深みにつながるのではないか。

最近では、高校によっては授業で企画書やプレゼン資料の書き方を教えているところもあるという。それ



田中真知

たなか まち

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に「アフリカ旅物語」（北東部編・中南部編、凱風社）、「ある夜、ピラミッドで」（旅行人）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、「惑星の暗号」（翔泳社）など。

が悪いとはいわないけれど、企画やプレゼンというのは基本的に自分のすることがいかに世の中の役に立ち、意味があるかという観点から物事を発想することである。そのトレーニングを若いうちから積んで、実社会で即戦力となる人材を育成するのが目的なのだろう。

だが、そんなことよりずっと大切なことがあると思う。何かが役に立つか立たないかなんて、時代によってあっという間に変わる。プレゼンなんて会社に勤めれば、いくらでも書く機会があるのだから、そんなものを早いうちにやっても意味がない。

無駄をしないこと、役立つこと、こだわりすぎていると、どうしても発想がちんまりとしていく。若いうちから社会に役立つことを考えることなどよりも、ちっとも役に立たないけど夢中になれるものを、思い切り時間を無駄に使ってすることのほうが、かならず将来的には創造的なものに結びつくのではないか。もっと道草を、もっと役に立たないことを、もっと無駄を。